

メルヒェンの日本的受容について ——メルヒェンは「童話」か?——

工 藤 幹 巳

0.0 序論

筆者が担当している授業の一つに、共通科目の「文学」がある。この講義では1984年度からテーマを「メルヒェン」としている。授業運営上の問題で試行錯誤を重ねた結果、このテーマに落ちついたのだが、ここではその細かい経緯については省略する。4月の最初の授業時に決まって学生たちに聞くいくつかの質問項目がある。そのうちの一つは、「メルヒェンと聞いて連想するものは?」である。無論、前もって「メルヘン」でなく「メルヒェン」であることの説明はするが、学生にとっては慣れ親しんだ「メルヘン」で連想するものでよいとしている。

回答はさまざまであるが、例をあげると、「ほほえましく、温かいイメージの話」「子供の頃読んだ話」「子供向けのおとぎ話」「ロマンチックで夢のある話」「子供の読むもの」「女の子が読む童話」「ハッピーエンドで終わる子供の出てくる話」「日常では起こらないようなことが起こったりする話」「子供が読むためのやさしい本」「王子様とお姫様」「絵本・魔法・ファンタジー・妖精」「夢の世界」「パステルカラー・ピンク色・虹色」等々である。一言で言い換えると、メルヒェンと聞いて連想するものは、子供が読む子供向けの夢のあるやさしい話、ということになろうか。このような連想は、講義のテーマをメルヒェンにして以来、全く変わらない。

本来メルヒェンとは、子供向けに限られたものではなかった。グリムのメルヒェン集の初版も、子供を対象としていたわけではない。しかし、ドイツでも市民社会が誕生して、子供への教育が必要視され始めた時期と相まって、格好の子供向けの教育書と見做されたため、対象に子供が入ってきたのである。そのためグリムは、あまりに残酷な話やエロチックな表現等を削除したり表現を変えたりしているが、それでも残酷な話がなくなったわけではない。それは、グリムがそのメルヒェン集の表題に『子供と家庭のメルヒェン集 (Kinder-und

Hausmärchen. 以下、慣例にしたがって KHM という))と冠したところにも理由を見いだすことが出来るだろう。

このドイツ語の表題は“Kindermärchen und Hausmärchen”をハイフンで縮めたものである。“Kindermärchen”は文字通り「子供のためのメルヘン」と解していいが、後半の“Hausmärchen”は頻出する語ではなく、現に独和辞典には載っていない。しかし、グリムのドイツ語辞典は無論のこと、ドゥーデン等には掲載されており、説明として「家庭の中で話されるメルヘン」(Märchen, wie es im häuslichen Kreise erzählt wird) とある¹⁾。それでは、この Haus の持つ意味合いは何か。Kinder に続けて Haus を置いたのは、子供たちだけでなく子供も含めた家族内で読んでほしい、という意味が底に働いているのである。当然その場合、大人も読み手としての対象になるのである。

ところが、前述のように、学生たちはメルヘンを「子供が読む子供向けの夢のあるやさしい話」と思っている。なぜ学生たちはこういう連想をするのだろうか。いや、学生たちに限らず、おそらくは現代の日本人のほとんどが似通った連想をするにちがいないが、それは何故なのだろう。その答を検討するのが本稿の目的である。

1.1 メルヘン

「メルヘン」は、国語辞典にも外来語として載っているばかりでなく、メルヘンチックなどという新造語が生まれたほどに、ごく身近な言葉である。しかし身近だからといって、われわれがその意味を明確に知った上で使用しているとは限らない、そういう多くの語の中の一つであると言える。それは、いくつかの代表的な国語辞典でメルヘンの項を引いてみれば明らかである。

広辞苑：【Märchen ドイツ】説話文学の一形態。神話・伝説に対するもので、空想的で驚異を含む物語。童話・おとぎ話とも²⁾。

大辞林：【ドイツ Märchen】おとぎばなし。昔話。童話。妖精・小人・魔法使いなどが活躍する空想的な物語³⁾。

岩波国語辞典：空想的・神秘的な内容の、短い説話。おとぎばなし。童話。
▷ドイツ Märchen。⁴⁾

新潮国語辞典：(ドイツ Märchen) 童話。おとぎばなし。メールヘン⁵⁾。

このように、どの辞典も概念規定が曖昧であるが、同時に注目しなければならない点は、ここにあげたすべての辞典が「メルヘン」を童話と同義としていることである。ドイツ語からの外来語であることを表記しているにもかかわらず

ず、原義とは少なからず乖離していると言わざるを得ない。

ドイツ語の辞典では次のように書かれている。

ドゥーデン：民衆の間で伝承された話で、超自然的な力や登場人物が人間たちの生活に介在して、たいてい最後に善人は報酬を与えられ、悪人は罰せられる話。⁶⁾

ブロックハウス・ヴァーリッヒ：たいていは口承の、時間空間規定のない比較的短い物語。物語の中では自然の法則は棚上げされて、超人間的な力や言葉を話したり行動したりする動植物や物などが人間の生活に介在し、最後はたいてい善が報われ悪は罰せられる。⁷⁾

このように、本来、ドイツ語の Märchen が意味するのは、「超自然的な力が介在する勧善懲悪的結末の、時間空間規定がない口承の短い話」である。もともとの語源は、Mär（物語、奇妙な話、信ずるに値しないか偽りの知らせ）という語に、縮小語尾 -chen が付いたものである。したがって、Märchen は、「短い物語、小話」くらいの意味なのだが、Mär は現在では古語となっているので、Märchen の -chen も縮小語尾としての意味は薄れてしまっている。上記のドゥーデンの説明に「短い」という形容詞が使われていないのも、そういうところから来ると考えられる。

いずれにせよ、ドイツ語の辞典には、日本の辞典に共通する、メルヘン＝童話という図式は出てこない。ここに第一の、そして最も重大な答があると考えてる。日本人にとってメルヘンとは、童話と同義のものであるという点である。童話という言葉からは、読んで字の如く「子どものための話」という意味しか浮かんでこない。ドイツ語でいう Kindermärchen である。先に引用して明らかのようにドイツ語辞典の説明では、「子どものための」という限定的な形容詞は使われていない。これに対し、日本での「メルヘン」は Kindermärchen を意味しているのである。これが、上記の学生たちの連想が生ずる第一の理由であると考えてる。なぜこうなったのだろうか。

1.2 「童話」という訳語

現在、日本で翻訳出版されているメルヘン集は、どれも「童話」と題されている。『グリム童話集』、『ペロー童話集』、『アンデルセン童話集』、というように。しかし、これではグリムのメルヘンとアンデルセンのそれとの違いが全くわからない。たとえ手を加えたとはいえ、口承の昔話を元に書かれたグリムやペローの Volksmärchen も、三話以外は全て創作であるアンデルセンの

グリムのメルヒェン集の表題が単なる「童話」を意味しないことは、前に述べたが、そのことは、ペローにおいてもアンデルセンにおいても同様である。『ペロー童話集』の原題は、*Histoire ou Contes du temps passé. Avec des Moralitez.* (岩波文庫の「あとがき」では『過ぎし昔の物語ならびに教訓』と訳されている)であって、*Histoire* (物語) も *Contes* (短い物語) も「童話」を意味しない。アンデルセンの場合も、原題 *Eventyr og Historier* の意味は『お話と物語』である。それどころか、アンデルセンは初めて出版した時は『子供のためのお話』という表題をつけ、後に「子供のための」ととったのであるから、むしろ、「童話」の意味から離れたと言ってよい。そのためか、岩波文庫の『アンデルセン童話集』の訳者大畑末吉は、「序」の中で「慣例に従って童話としておきましたが」と断っている。⁸⁾

明治時代に日本語に翻訳されたグリメルヒェンについては、野口芳子氏の優れた研究があるので、ここではただ明治期に訳された KHM の表題はどう題されていたかということのみをみることにする。野口氏の「⁹⁾翻訳年表」を借りて分類すると、次のようである。ただし、シリーズ物は 1 と数える。

童 話	2	——	——	修身童話
西洋昔噺	1	——	——	独逸童話集
お伽噺	7	——	——	
西洋妖怪奇談	1	——	——	
家庭お伽文庫	1	——	——	
お伽譚	1	——	——	
世界お伽袋	1	——	——	
		——	——	

— 56 —

1.4 高木敏雄の「童話」—大正時代

高木敏雄は大正5年(1916)に上梓したその著『童話の研究』—校閲者の関敬吾によれば「幻の名著」であり、わが国最初の童話研究概説—の中で、童話を児童の説話という意味で初めて使ったのは、山東京伝と曲亭馬琴あたりらしく思われる、と言っている。そして、山東京伝が童話の二字を、あるところでは「むかしばなし」と訓じ、あるところでは「どうわ」と読ませているのは、面白いと思う、とも書いて¹⁰⁾いる。

また、曲亭馬琴については、『浦島太郎』の話を経典的伝説としないで、民間説話として論じたのは、実に非凡の卓見といわざるを得ない。馬琴は、右の(「浦島太郎」「猿蟹合戦」他の)七篇の説話に、童話という名をつけて、童話の二字を「わらべのものがたり」と読ませている。馬琴が歴史的伝説もしくは地方的伝説と、民間童話との区別を明瞭に理解して、童話の二字を正しく使ったのは、京伝とともに特筆すべきことである。¹¹⁾と賞賛している。

つまり、山東京伝にあっては「童話」は、「むかしばなし」であり「どうわ」であったが、馬琴においては、文字通りの意味の「わらべのものがたり」であった。そして、高木敏雄が民間説話と言った直後に民間童話と言い換えていることから、高木においては説話と童話が同義であることがわかる。

つづけて高木敏雄は、

世界の文明国を通じて、かくのごとき適切な正しい熟字は、自分の知っている限りでは、日本語における童話とドイツ語におけるキンデルメールヒェン(Kinder-Märchen)とただ二つしかない。キンデル(Kinder)は児童の義、メールヒェン(Märchen)は元来「はなし」の義であったのであるが、今では童話の義に用いられ、学問上の議論でメールヒェン(Märchen)といえ¹²⁾ば、必ず童話のことにきまっているようになった。

と述べている。このあたりで高木の弁は説得力を欠いている。「キンデルメールヒェン」を童話の意味であると説明しながら、「キンデルメールヒェン」を「メールヒェン」に同義のものとして置き換えてしまっているし、「メールヒェンといえ¹²⁾ば、必ず童話のことにきまっているようになった」ことの背景が明確ではない。

これより少し後に、高木はこう書いている。

自分はグリムのいわゆる『キンデル・ウント・ハウスメールヒェン』(Kinder-und Hausmärchen)の意味に、童話という語を使ってみたい。二十世紀の今日においては、かく使うのが正しい、否か¹³⁾く使うのが、童話という

語の唯一の正当な使用法であると信じている。¹³⁾

ここに高木の願望という形で表された本音が現れていると言っていい。『キンデル・ウント・ハウス・メールヒェン』の意味に、「童話という語を使ってみたい」という高木の願望は、しかしながら、かえって「童話」の概念を曖昧なものにしてしまったのではないか。すなわち、Kindermärchen を童話としたまでは良かったのだが、Märchen をも童話とし、さらには KHM までも童話としたことによって、童話の概念が広がり、曖昧になってしまったのである。Märchen と名のつくものは、全て「童話」になってしまうこととなり、一旦「童話」という語が一人歩きすると、次には、この語が持つ意味だけが、すなわち「子供のための話」という意味だけが、人々の中に印象づけられてしまうことになるのである。

1.5 金田鬼一の「童話」——大正末期から昭和・戦前

KHM の全訳で知られる金田鬼一は、岩波文庫版『グリム童話集』の序で、「メールヒェン」の語義説明をした後、次のように述べている。

念のために以上を要約すれば、ドイツ語の『メールヒェン』は日本語の『おとぎばなし』にあたるというわけなのであるが、このおとぎばなしなるものは、戦国時代以降の御伽衆の咄に似かよった性格のもので、もとより成人相手の咄であり、『キンデル・メールヒェン』となって始めて子ども向きのお伽噺となり、内容も自然に変わってくる。これが今日わが国で一般に『童話』といわれるもので、また、メールヒェンという語も、今日ではこの意味に慣用せられている。ただし、童話というのはわれわれが新しく造った言葉ではない。¹⁴⁾

そしてこの後、高木敏雄と同様に、山東京伝と曲亭馬琴の例を引く。

グリムは、正確に言えば、児童用おとぎばなし（キンデル・メールヒェン）と家庭向きおとぎばなし（ハウス・メールヒェン）との合体したもので、京伝のいわゆるムカシバナシではあるが、馬琴のワラベノモノガタリではない。しかし、グリムのいう『ハウス・メールヒェン』とは、¹⁵⁾
として、グリム自身の「まえがき」での言葉を引用し、さらに続ける。

この書物は全体として単に児童だけではなく、若々しい心をもつ成人の読物にもしたいというのがグリムの念願であり、また、訳者（金田）は、童話とは児童のプシューヒェすなわち童心ともいうべきものを作者とする作り話であると信じているがゆえに、この訳本の標題は、『児童および家庭お伽噺』

という長い名称を用いず、簡単に『グリム童話集』としておく。この名称はグリムの真意に添わ¹⁶⁾ないものではない。

この岩波文庫版における金田の「序」は、昭和13年に書かれたものであるが、訳本自体は大正末期に『世界童話大系』に収められたものの改訂版である。『世界童話大系』のうち、獨逸篇は(1)(2)の2巻に分かれていて、(1)は大正13年、(2)は昭和2年の刊行である。そこでも金田はすでに表題を『グリム童話集』としている。

獨逸篇(1)の前書きにあたる「グリム童話集解題」で、金田は次のようにメルヒェンの訳語について述べている。

——茲で一言したいのは、獨逸語のこの「メールヒェン」といふ語を日本語でどう取り扱ふべきかである。「メールヒェン」といふのは、古い獨逸語で「口でのべられたこと」「噂」「しらせ」等の意味を有つてゐる語の縮小名詞であるから、原義に従へば單に「おはなし」といふ日本語を當てて置けば宜いのである。此の解題にもこれまで大抵この用語を使って置いたが、時には都合の悪いことがあつて、「お伽噺」又は「童話」といふ語を用ひたこともある。しかし、メールヒェンの譯語に困るのは日本語だけではない。英語でも、グリムのメールヒェンのことを、或は Fairy tales と稱ひ、或は household tales と稱ひ、或は popular stories と稱ひ、或は folk-lore と稱つて、一定の譯語が出来てゐず、學術上の用語としては矢張り原語をそのままに使用してゐる。これは英語の「フォーク・ローア」といふのがそのまま獨逸でも使用されてゐるのと同じことで、語の概念の精確を期する上に於て當然のことである。「メールヒェン」はメールヒェンであつて日本語の「おはなし」でもなく、「おとぎばなし」でもなく、「童話」でもないのであるが、英語國民が自國の似よりの言葉を當てはめると同じ理由で、この解題にも便宜上こ¹⁷⁾れらの言葉を用ひ、必要に應じて獨逸の原語をそのまま使つて置くことにする。

この箇所の前半で、メルヒェンの語の概念を明解に論じて、その訳語についても精確を期さねばならないとしながら、残念ながら、最後の一文で曖昧にしてしまつてゐる。このことは、獨逸篇(2)の「解題」でよりはっきりした形をとつてくる。冒頭で、

グリム兄弟の『童話及び家庭お伽話集』は獨逸の各地に發生したお話を大集成したものでありますが、それは第十九世紀初頭のことであります。しかしながら、童話の發生は……¹⁸⁾

と書いて、それ以後は「童話」という語のみしか使用していない。しかも、改

訂版の「序」では『児童および家庭お伽噺』と言っているのに対し、ここでは最初に『童話及び家庭お伽噺集』と呼んでいる。Kindermärchenを童話と訳しているまではよしとして、あとは全て「童話」と言い、訳本自体も『グリム童話集』としている。「『メルヘン』はメルヘンであつて日本語の『おはなし』でもなく、『おとぎばなし』でもなく、『童話』でもない」と言いながら、「童話」に傾いていく過程が見て取れるのである。

したがって、後に文庫版で改訂版を出すにあたり、その「序」であらためて「童話集」と題することの理由付けをしたのだと考えられる。しかしながら、この金田鬼一の場合も、「簡単に『グリム童話集』としてお」いたがために生じる、後の童話という語の「一人歩き」までは気が回らなかったようである。

1.6 「童話」の定着

大正から昭和にかけて富山房から発行された『模範家庭文庫』というシリーズでは、「グリム御伽噺」「アンデルセン御伽噺」と題されており、「日本童話寶玉集」「支那童話集」「朝鮮童話集」「印度童話集」というように、「童話」は、日本を含めたアジアのものに限られている。同じシリーズの中でも、この時代ではまだ、二様の言い方が混在していて、どちらかに定まっていたわけではないのである。大正5年に高木敏雄が、「『キンデル・ウント・ハウスメルヘン』(Kinder-und Hausmärchen)の意味に、童話という語を使ってみよう」と願望とともれる言い方をし、昭和13年に金田鬼一が「『児童および家庭お伽噺』という長い名称を用いず、簡単に『グリム童話集』としておく」と言った、その言い方からも、大正から昭和13年ごろにかけては、まだKHMを童話と訳すことが一般的ではなかったことがわかる。

しかし、そうしてしまっただけのために、その後KHMは「童話」以外の訳語では呼ばれなくなり、「童話」は定着していき、KHMイコール「子供の、子供向けの話」と解釈されるようになったのである。極めて曖昧な過程を経て「童話」に落ちついていき、その後は語のみが一人歩きしていった、もはや誰も疑問を抱かなくなる、ここに「メルヘン」についての日本的受容の根幹があるように思う。

しかしこれだけでは学生たちが抱くイメージの説明にはならない。彼女たちは、メルヘンではなく「メルヘン」という語からのイメージを膨らませたのであるし、何よりも自分たちの体験から一定の意味規定を持つに至ったと考えられるからである。

2.1 何を読んだか——昭和・戦後から現代

それでは、今の学生は子供だった頃、一体どのような本を読んでもらったり自分で読んだりしたのだろうか。個人差はかなりあると思うが、市販されている本のうち子供向けの入手しやすいものを、その対象として考えてみる。

2.2 小学館の「育児絵本」シリーズ

小さな書店でも売られているので入手しやすく、「1歳から5歳まで」と対象年齢が低く、しかもこのシリーズだけで70巻と種類も多い、これらが考察の対象とする所以である。このシリーズは「1歳から5歳まで」を、さらに「1歳から3歳のかたに」(41巻)と「3歳から5歳のかたに」(29巻)に分けてあり、前者は動物や乗物が主で、後者のほとんどが日本と外国の昔話である。監修は波多野勤子で、絵については各巻に挿絵画家の名が記してあるが、本文の筆者については記されていない。

このシリーズは、その名前からも明らかなように、子供、それも幼児向けである。また「育児」を冠していることから、巻末に「ママのてびき」と、同ページに「おかあさまがたへー内容の解説」という欄もある。グリムメルヒェンを育児という教育のために利用しているという点で、明治期の修身・道徳といった教育界による利用の流れを受けるシリーズと見做していいであろう。したがって、子供に教えたくない場面は削られたり、変えられたりして、正に換骨奪胎の最たるものである。いくつか例をあげてみよう。

2.2.1 「しらゆきひめ」

グリムの『白雪姫』のモチーフとしては、王妃が姫を執拗に殺そうとする一狩人に殺させて肺と肝臓を持ってくるよう命ずる・自ら紐売りの女に化けて紐で姫の胸を締めつける・櫛売りの女に化けて毒入りの櫛で殺す・百姓女に化けて毒入りリンゴを食べさせる一、姫の蘇生、王妃への罰、が主なものであろう。しかし、「育児絵本」シリーズの『しらゆきひめ』では、それらのほとんどが記述されていなかったり変えられている。幼児向けの絵本だから当然ということなのか、王妃が姫を殺そうとするのは、リンゴを食べさせることだけであるし、王妃への罰については何の記述もない。

グリムにおいては、メルヒェンに特徴的な3という数が、王妃自ら殺しに出掛けるのが3回というところに表れているのである。この「繰り返し」が、それも3回の繰り返しがメルヒェンにとって重要な要素であって、小人たちの忠告にもかかわらず、3回も王妃に騙される姫の純真な性格にハラハラさせられ

るのであるし、それほどまでも執拗に殺そうとした王妃だからこそ、最後に真っ赤に焼けた鉄のスリッパを履かされて死ぬまで踊るという罰を受けるのである。

例えばこのシリーズの話のように、王妃が姫を殺そうとするのがリングを食べさせることだけであるとしても、王妃への罰について何の記述もないのはどういことだろうか。先の辞典の解説にもあったように、因果応報、勧善懲惡をその基本的概念の中に含むメルヒェンには敵切ではない結末である。

また、白雪姫がリングを食べて死んだ後、KHM では姫は「長い、長い間柩の中に横たわっていた」ことになっており、王子が現れるのは何年かが経ってからなのであるが、この本では、²⁰⁾小人たちが姫をガラスの箱のなかに入れてお別れのお祈りを始めると、「ちょうどそこへ」隣の国の王子が「通りかか」る。そして、姫の口からリングが出て生き返るきっかけは、KHM では、王子の家来が柩をかついで行く途中、灌木につまづいた拍子に柩が揺れたことなのだが、これもこの絵本では、「おうじさまは、ひめを だきあげて、おわかれの あいさつを しようと しました。すると、その ひょうしに、くちから どくの りんごが でて、ひめは めを ぱちっと あけました。」と書かれている。²¹⁾

これら二つの点に関しては、「書き換え」では無さそうである。監修者による巻末の「ママのてびき」に、「もとの話では」としてあらすじを書いている箇所があるが、その最後に、「とうとう姫は死んでしまいますが、通りかかった王子に抱かれると、リングが口から出て、生きかえります。最後は、王子と結婚することになって、めでたしめでたしとなります。」と書かれているからである。²²⁾王妃の罰についても記述がないのだが、「もとの話」とは KHM ではないのだろうか。

「ママのてびき」には次のように書かれている所もある。

それから、話の中の矛盾、ことに毒のリングを食べた人が、何日もたってから、そのリングが口から出たとしても、毒は消えません。もう生きかえることはないでしょう。このへんは、むしろ、はっきり教えておいたほうがいいと思います。そうでないと子どもは、その万一をたのみにして、なんでも口にいれてもいいように思うかも知れないからです。

ここには、監修者の、子供は物語の中の世界を現実の世界に直結して考えるものである、という考えがみてとれる。しかし、他の絵本を見るとより明確な形で監修者の姿勢がわかってくる。

2.2.2 『かちかちや』

このシリーズには多くの日本昔話も入っているが、そのうちの『かちかちや

ま』の「ママのてびき」で、同じ監修者は次のように書いている。

「かちかちやま」をこのシリーズに入れるとき、私はずいぶん考えました。日本特有のだましうちてきの、かたきうちの様子があまり露骨に出ている物語だからです。しかし、日本に古くから語りつたえられているカチカチ山もしらないで育ち、おとなになるというのも、なにか不自然に思われますし、またどこかでこの話を、昔通りの形できくことになるくらいなら、いっそう新しい、いまの子どもになっとくのいく形で、この話をきかしておいたほうがいいのじゃないだろうか、²³⁾そう思ってこれを取りあげることにしました。伝承昔話の「かちかち山」も知らないで育ち、大人になるというのも、不自然だと言いながら、昔どおりの形で聞くことになるくらいなら、今の子どもに納得のいく形で聞かしておいた方がいい、とはどういうことだろう。伝承昔話もそのまま与えるのは良くない。とは言え、全く知らないのもどうかと思うので、今の子どもたちに合った形に大いに手を加えて与えよう、ということらしい。「いまの子どもになっとくのいく形」とは、どういう形なのだろう。この絵本では、もちろんお婆さんは狸に殺されないし、最後に狸は沈んでいく泥船から兎に助けてもらう。これについて、「ママのてびき」には次のように書いている。

ここでは、他人のめいわくを考えないで、自分がってのことをする、約束をまもらない、らんぼうをする、などという性質をもったタヌキを、いくらいってもわからないのでこらしめたという形をとることにしました。そういっても、第一、子ダヌキをしばるなどという体罰をあたえることは、よくないことですし、そのあと、ウサギが火をつけてやけどさせたり、どろぶねにのせたりするのは生命の危険さえあるけしからぬことだと思います。

しかし、まあ、むかしのお話だし、第一、動物同志のお話なのですから、子どももかるくうけてくれることだろうと思います。

文章はできるだけこの線にそって書いてありますが、もし神経質のお子さんと、このことを気になさるようだったら、「そうよねえ、おりに入れてやればよかったかしらね。」²⁴⁾といったふうに話してあげてください。そうすればお子さんも気がすむでしょうから。

この箇所を読むと、虚構の物語世界と現実世界を同一視しているのは、監修者自身であると思われる。狸はお婆さんを殺し、汁にしてお爺さんに食べさすという大罪を犯したから、泥船に乗せられて殺されるのである。「生命の危険さえあるけしからぬこと」とは、あまりにも虚構の世界に遊ぶ楽しみを知らぬ

者の言ではないのか。一体、ここまで変えてまでして「かちかち山」を幼児に話して聞かせることが必要なのだろうか。これは、「子どもに納得のいく形」ではなく、大人側から考えた「子どもに与えるのに納得のいく形」なのではないのか。こうして、どんな話もハッピー・エンド、悪者は改心してみんない子になって終わることになるのである。

2.3 講談社のディズニー絵本

戦後の子供たちにとって、さまざまな面でディズニーの影響が大きいことは否定できない。ディズニーの劇場用アニメ作品は、原話をもはや全くと言っていいほど変えてしまっているし、表現手段も異なっているので、原話と比較して論ずる意図はない。ここでは、そのディズニーのアニメ『白雪姫』を絵本にしたものの同じ箇所を比較して論じてみたい。先に引用した「育児絵本」と同じ場面を比較する。

①昭和37年発行の絵本（文：村岡花子）

……しらゆきひめを、その なかに ねかせて、みんなで、ばんを していました。(改行) ある ひの こと、ひとりの おうじさまが、もりにきて、しらゆきひめを みつけました。(改行) しらゆきひめが、あまりにきれいなので、おうじさまは、いきで いる ひとに するように、ひたいに くちづけを しました。

②昭和53発行の名作絵話（文：記載なし）

こびとたちは、なんとかして、ひめを、いきかえらせたいと おもいました。(改行) ちょうど そのとき、となりの くのに おうじが とおりかかりました。「おお、なんて うつくしい ひめだろう。」(改行) おうじは、おもわず こう いって、しらゆきひめを だきあげました。(改行) すると、くちの はしから、りんごが ぽろりと おちて、ひめは、ぱっちりめを あけました。

③昭和63年発行の絵本（文：立原えりか）

しらゆきひめを かこんで、みんなは まいにち なきました。ある 日の こと。王子が とおりかかりました。(改行) 「しらゆきひめ、ずっとあなたを さがして いました。」(改行) 王子は しらゆきひめに そっとキスしました。(改行) しらゆきひめは、目を ひらきました。王子の あいの キスが、わるい まほうを といたのです。

このように、同じ出版社から刊行され同じ絵を使った絵本でも、王子が現れ

る時と、姫が目覚めるきっかけが、出版年と筆者によって異なっている。特に、姫が目覚めるきっかけは、アニメでは王子のキスによってであるのに、②の絵本では、そう書かれていない。また②では、アニメには存在しない「口のはしからリンゴがぼろりと落ちる」などという表現も加えられている。

2.4 講談社の絵本 クラウン版

このシリーズの監修者は3人で、肩書とともに名前が表紙裏に大書してあり、いかにもこのシリーズの格を誇示するかのようである。作家の石坂洋次郎、お茶の水女子大学教授で同付属小学校長・幼稚園長の坂元彦太郎、それに愛育研究所所員・文学博士の波多野勤子である。昭和38年刊の『白雪姫』の文を書いたのは久保喬で、前書き部分に次のように書いている。

原話は、おとなにも味わい深いものですが、それだけに、ややどぎつさを感じさせるところもあります。この「白雪姫」でも、そういう点はよく考慮しまして、絵も文も、幼い子供たちにふさわしい形のものにするように努めました。(改行) 白雪姫の純真で、すなおな性格が、ねたみ深い王妃の邪悪な行為にそこなわれないで、ついに幸福をとらえる話は、だれにも共感できます。それに、小人の出てくるところにも魅力があって、楽しい、豊かな夢を与える物語になっています。²⁸⁾

この絵本でも、王子は、姫が死んで柩に寝かせられた後、すぐに通りかかることになっている。王妃が何らかの罰を受けたとの記述もない。「おとなにも味わい深いものを、幼い子供たちにふさわしい形のものにするように努め」と言うが、悪者の王妃に対する罰もない話が、一体本当に「楽しい、豊かな夢を与える物語」になっているだろうか。ここでも大人側から考えた「子どもに与えるのに納得のいく形」が発揮されているのである。

その他、文章では「黒い髪」と言っているのに挿絵の白雪姫は金髪であったり、²⁹⁾ 姫を殺そうとする王妃の行為はすべて記述しているのに罰については何の記述もない等、³⁰⁾ メルヒェンの本質を逸脱した絵本の枚挙には暇がない。

3.1 戦後の「子ども観」との関係

第2次世界大戦後、日本は民主主義国家として生まれ変わり、まずは戦前戦中の軍国主義的思想からの脱却を図った。「子ども観」の見直しも、その一つであったと言える。戦時中に「少國民」という言葉があったが、子どもを「年の若い国民」と見て、将来の国家体制を担う存在と見做していたのである。し

かし、戦後、民主主義の時代になって、まずは「個人」が尊重されることになると、「少國民」的思想からの反省・反動を背景に、「子ども」への関心が増大することとなった。

「子ども」への関心が増大したこと自体は肯定的にとらえていいのだが、それが具体的な形をとって現れた時、歪んだものになっていった。例えば、ごく幼い時期からさまざまな知識を教え込む早期教育も、そういうものの一つである。早期教育と言っても英才教育という意味ではない。明治期の子ども向け雑誌が都市の富裕層の子どもたちにしか行き渡らなかったのと違って、経済成長期を迎えると、ごく一般の家庭でも、幼稚園に入る前から絵本が与えられるようになったのであり、いわば、日本全体の底上げ型の早期教育なのである。

また、これらを図らずも助長させた背景として、「学校教育法」の施行があると考えられる。大正15年に公布された「幼稚園令」には、何ら関係する条文はないのだが、昭和22年施行の「学校教育法」に、初めて「童話」の二字が記載されるのである。同法「第七章幼稚園」の第78条（目標）第四項に「言語の³¹⁾使い方を正しく導き、童話、絵本等に対する興味を養うこと。」と明記される。文部省によって、幼稚園の目標の一つに「童話・絵本に対する興味を養うこと」がうたわれたことの意味と影響には計り知れないものがある。「童話」が一人歩きではなく、認証されて「ひとりだち」したからである。

しかし、メルヒェンにとっては、「童話の認証」のネガティブな影響が現れることとなってしまった。そこに商業主義が入り込んだことと、絵本の監修者や書き手の姿勢である。前者は、いいものを時間をかけて編集出版するのではなく、経済効率を優先するあまり、大量にしかも類似した絵本を次々に出版し、大量販売するに至った。後者は、時代的な「子どもへの関心の増大」に乗って、子ども向けにメルヒェンを書き換えたわけだが、それは、「大人（監修者）からみた子どもの理想像」を念頭に入れて行われたことだった。「どぎつい、残酷、けしからぬ」と監修者が判断した事柄は、子どもには読ませてはならないと削除され、毒にも薬にもならない甘い話、原型を止めない話が「グリム童話」として大量に出回ったのである。学生たちの子供時代に知った「童話」とは、正にその大部分がこのようなものだったのである。

4.1 まとめ

本来メルヒェンは、手を加えられる、再話される運命にあるものと言ってよい。日本のみならず、外国でもさまざまに再話されてきている。しかし、メル

ヒエンを読むという行為は、大抵の場合、一回性のものではないだろうか。繰り返し読み返すとしても、同じ本を読むであろうし、他の本と読み比べたりしないものである。だとすると、何を読むか・読ませるか、は、大きな問題である。

高木敏雄は『童話の研究』の中で、次のように言っている。

桃太郎が鬼ヶ島を征伐して、宝を取ってきたというのは面白くないから、お土産に持ってきたと改めなければならぬとか、「舌切雀」の老婆が雀の舌を切ったというのはあまり残忍な行為で面白くないから、老婆が一時の怒りに心を制せられて、思わず雀の舌を切ったというように改めて、老婆に個人性を賦与した方がいいとか、いろいろなことをいって得意がっている。

この種の論法でいうと、世界のすべての童話は児童に対して有害である。童話ははたして、それほど厳格に批評されなくてはならぬものであるか。また童話はこれらの人士の非難に対して、はたして弁解の辞を持たぬのであろうか。

童話はそれ自体において独立した民間詩である。高等文芸と等しく、空想の産物で、童話に対する一切の批評は、この見地から行われねばならぬ。この見地から研究してみると、童話は以上の非難に対して、じゅうぶんに弁解することができる。³²⁾

そして、これに続けて、「童話に現われたる神怪不可思議の分子は、神話や伝説や、他の文学に現われているものに比して、いちじるしく詩化されて、児童の神経をはなはだしく刺戟するような恐れが少ない」と述べている。³³⁾ また、残酷な話についても、次のように言っている。

時としては惨酷にわたる描写も、童話において許されうることがある。その描写の対象となっている事実が、現実界において実際ありうべき性質のものであれば、その描写は排斥すべきであるけれども、現実界において実際ありうべからざる性質のもので、かつ実際ありうべからざるものと、児童に容易に判断されうるとき性質の事実ならば、その描写は必ずしも有害なる影響を与えるとは限らぬ。³⁴⁾

ここには、高木のメルヒエンに対する理解と、「児童」に対して持っている、信頼とも言うべき信念が表されている。

児童に不自然なこと、空想的なことを語り聞かせるのは、面白くない、という非難は、児童心理学者、教育学者の一部において、しばしば唱えられたことである。かくのごとき理窟一遍の学者は、空想の貴重なことを知らぬ。³⁵⁾ とも述べているが、大正5年に明解に批判されたことが、昭和の戦後になって

も繰り返されたのである。

高木の時代とは違って、今日では日本や世界の出来事が時々刻々、テレビを通して家庭のなかに入り込んでくる。衝撃的な内容の事件が、生々しい映像とともに詳細に伝えられるのも稀ではない。メルヒェンの世界での残酷な場面と比して、一体どちらが子供にとって有害なのか。高木敏雄の言う「現実界において実際ありうべき性質のものの描写」が排斥されず、逆に、「現実界において実際ありうべからざる性質のもので、かつ実際ありうべからざるものと児童に容易に判断されうるとき性質の事実」が排斥、隠蔽されているのである。

注

- 1) Deutsches Wörterbuch von Jacob und Wilhelm Grimm. Bd.10, S.683, 1984, dtv, München.
- 2) 新村出編：『広辞苑』第4版, 2524頁, 1991年, 岩波書店.
- 3) 松村明編：『大辞林』第2版, 2540頁, 1995年, 三省堂.
- 4) 西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫編：『岩波国語辞典』第5版, 1150頁, 1991年, 岩波書店.
- 5) 山田俊雄・築島裕・小林芳規・白藤禮幸編修：『新潮国語辞典—現代語・古語』第2版, 2091頁, 1995年, 新潮社.
- 6) Duden, Das große Wörterbuch der deutschen Sprache in sechs Bänden. Band 4: Kam-N, S.1736, Bibliographisches Institut Mannheim 1978.
- 7) Brockhaus Wahrig Deutsches Wörterbuch in sechs Bänden. vierter Band K-OZ, S.585, F.A. Brockhaus Wiesbaden u. Deutsches Verlags-Anstalt Stuttgart, 1982.
- 8) 大畑末吉：『完訳アンデルセン童話集（一）』改版第2刷, 3頁, 1984年, 岩波書店.
- 9) 野口芳子：『グリムのメルヒェン—その夢と現実』第1版, 付属資料③, 7頁, 1995年, 勁草書房.
- 10) 高木敏雄：『童話の研究』（関敬吾校閲）, 講談社学術文庫158, 10頁, 昭和52年, 講談社.
- 11) 高木敏雄. 12頁.
- 12) 高木敏雄. 12頁.
- 13) 高木敏雄. 14頁.
- 14) 金田鬼一：『完訳グリム童話集（一）』, 岩波文庫32-413-1, 5頁, 1982年, 岩波書店.
- 15) 金田鬼一. 6頁.

- 16) 金田鬼一、6～7頁。
- 17) 『世界童話大系』第2巻ドイツ篇(1)、9頁、大正13年原本発行、世界童話大系刊行会／平成元年復刻版発行、名著普及会。
- 18) 『世界童話大系』第23巻 獨逸篇(2)、1頁、昭和2年、世界童話大系刊行会。
- 19) 『模範家庭文庫』第1輯『新譯アンデルセン御伽噺』、長田幹彦訳、昭和2年15版、富山房。
- 20) この点に関しては、宮下啓三著『メルヘン案内ーグリム以前、以後』(NHKブックス413、昭和57年)26頁に指摘がある。
- 21) 『育児絵本』61号『しらゆきひめ』、頁記載なし、1962年、小学館。
- 22) 同上、「ママのてびき」2頁。
- 23) 同シリーズ67号『かちかちやま』、「ママのてびき」1頁。
- 24) 同上、「ママのてびき」2頁。
- 25) 『講談社のディズニー絵本』4号『白雪姫』、20～22頁、昭和37年、講談社。
- 26) 『ディズニー名作絵話』13号『白雪姫』、31頁、昭和53年、講談社。
- 27) 『ディズニー名作童話館』7号『白雪姫』、34～36頁、昭和63年、講談社。
- 28) 『講談社絵本クラウン版』昭和38年8月号上(第2巻第15号)『白雪姫』、表紙裏頁、講談社。
- 29) 小川未明・坪田譲治監修『たのしい名作童話』10号、山本藤枝『しらゆき姫』、昭和32年、ポプラ社。
- 30) 『国際版少年少女世界童話全集』第1巻、生源寺美子『しらゆきひめ』、昭和53年、小学館。
- 31) 森隆夫編：『90年度版必携学校小六法』、25頁、平成元年、協同出版。
- 32) 高木敏雄、109～110頁。
- 33) 同上、110頁。
- 34) 同上、113～114頁。
- 35) 同上、116頁。

(くどう よしみ 本学教授)